

ナブラワークスとワールドサプライが挑む

“顔パス”で おもてなしの進化を—— 物流の裏側を変えるAI顔認証の挑戦

商業施設の納品受付作業は、地下の薄暗い搬入口やバックヤードの通用口など、目立たない物流の裏側で日々繰り返されている。そこに今、AI顔認証による“顔パス”という変革の波が押し寄せようとしている。

背景にあるのは、深刻化する人手不足やドライバーの長時間拘束といった「物流2024年問題」、そして入館証の貸し借りや不審者の侵入リスクなど、アナログ管理に起因するセキュリティ課題だ。

こうした問題の同時解決をめざし、ワールドサプライは、AI顔認証技術に特化したスペシャリスト集団・ナブラワークスとタッグを組んだ。

現場のリアルに向き合いながら実装に挑む、技術者たちの挑戦が今、始まっている。

株式会社ワールドサプライ
佐藤 つぐみ

ナブラワークス株式会社
PD事業統括
小檜山 悠氏

現場が教えてくれた、 “本当に使える顔認証”の条件とは

「最初は“これならできる”と思っていたんです。でも、実際に現場を訪れてみて、正直、想像以上にハードルが高いと感じました。照明は暗く、帽子やマスクで顔の大部分が隠れている人も多い。さらに、複数人が同時に映り込む場面もある。これが物流の現場か、と衝撃を受けました」——

ナブラワークスの小檜山氏は、ワールドサプライから提示された物流現場の環境が、通常の顔認証には厳しい条件であることをすぐに理解できたという。

同社は大規模オフィスビルや大手食品メーカー工場の入退館システムなどにも技術を提供してきた実績を持ち、顔認証分野における経験豊富な精鋭チームである。「だからこそ自社の技術で挑む価値がある」と感じ、開発に踏み切った。

両社の出会いは、ワールドサプライの親会社であるSGホールディングスグループが運営する、オープンイノベーションを推進するためのプラットフォーム「HIKYAKU LABO」だった。ワールドサプライが掲げたテーマは、「納品受付業務の無人化」。そこにナブラワークスが手を挙げた。



当時の状況を振り返る小檜山氏

業界初の挑戦—— ノウハウと共創が 突破口を開いた

当時を振り返り、小檜山氏は「商業施設などの納品受付に顔認証を導入する試み自体、業界でも前例がほとんどなく、まさにチャレンジでした」と語る。開発初期には技術的には対応できると感じていたものの、現場に足を運んでみると、照明が暗く、帽子やマスクで顔が隠れる人も多く、複数人が同時にカメラに映り込む。そんな“理想と異なる現実”に直面したのだ。これが物流現場のリアルかと驚かされたという。特にドライバーの属性や動線に合わせた画面設計や機器配置については、開発陣だけではなかなか方向性が定まらなかったが、商業施設の納品代行業務に豊富な実績を持つワールドサプライが、現場視点での確かな助言を重ねたことで、設計は次第に形になっていった。

「現場で直接的に物流の課題解決に関われる機会はそう多くはありません。だからこそ、技術者として強いやりがいを感じました」（小檜山氏）。



事前登録しておけば画面タッチだけで顔認証が始まる（写真はデモ機）

実証実験では、ドライバーが初回に顔を登録すれば、2回目以降は瞬時に顔認証を行いICカードを受領できる。将来的にはICカード不要で“顔パス”入館が可能になる予定だ。

「ドライバーの方々のなかには年配の方も多いので、操作をシンプルにすることにとことんこだわりました。ボタン配置や配色ひとつにも意味があるんです」

顔認証による無人受付は、施設側の省人化とセキュリティ強化、そしてドライバーの待機時間短縮を同時に実現するソリューションとして貢献が期待できる。

技術は人のために “おもてなし”の姿勢を

「AI技術って、使われて初めて意味がある。開発側からすると、ドライバーの方が“何も作業をせずにずっと通れてる”っていうのが一番うれしい瞬間なんです」そう語る担当者の言葉に、このプロジェクトが単なるテクノロジー導入ではなく、“DXで現場に寄り添う”ことがにじむ。まさにワールドサプライが大切にする「おもてなし」の姿勢である。

現場を熟知するワールドサプライと、先端技術を磨くナブラワークスの共創が、社会全体の課題に新たな解決策を提示しようとしている。その挑戦は着々と進んでいる。



実証実験前にデモ機を最終確認する開発担当者

●お問い合わせ先
株式会社ワールドサプライ

Email :
ws@world-supply.co.jp